

ウレイミの部族連合が垂直に分離したことを示すものであった。ドゥレイミ事件後、体制の救世主たる軍内部のエリート部族集団は分裂の危機を迎えている。大統領による公式な形での慰撫措置も取られ、当時のアリ・ハサン・アル=マジード国防大臣が不要な混乱の責任を負わされて、解任された。

こうした亀裂を覆うために、軍と治安組織の再編が必要となった。軍のエリート集団から新しい軍組織を組織する目的で、治安機関を統括するクサイ・サッダーム・フセインが司令官を務める部隊が1997年2月に編成された。クサイは、この新生軍の司令官に任命され、その結果彼は事実上の副最高司令官に昇進した。しかしながら、8月にクサイに代わりカーミル・ムスタファ將軍が司令官に就任している。ムスタファは殺されたフセイン・カーミルの義理の兄弟であり、ムスタファの弟のジャマールは大統領の娘婿である。この突然の交替は、軍と文民の微妙な競争関係、権力の極端な集中に対する懸念からくるものかもしれない。

5. 衝突と分裂

政治的に言えば、血縁集団への依存は体制の社会的基盤の狭さの原因であると同時に結果でもある。ベジャートによる権力の独占は、国家建設上の相互作用のプロセスを混乱させた。血縁的紐帯は定義的にも機能的にも父権的であり排他的であるのに対して、国家における社会的紐帯は普遍的であり包括的である。血縁主義は、教育、業績主義、没個性的な規制規範などに基づく近代的価値観と衝突する。それゆえ体制は、有機的忠誠と機械的忠誠の間で衝突が起こらないように配慮している。

しかし衝突は避けられず、バアス党支配の最初の十年間こそがその衝突期間だったと言えよう。1973年7月に発生した、治安局長で地域指導部メンバーのナーズィム・カッザール(シア派)によるクーデター未遂事件は、国家と党に対するベジャートの覇権に対する反発が原因の一つであった。第二は1979年6月に発生した、いわゆるサッダーム・フセインに対する謀略であった。地域指導部メンバー6人を含む党指導者26人がこの謀略に連座して有罪になり処刑されたが、その中にはベジャートあるいはその部族同盟の出身者は一人もいなかったのに対して、シア派の指導者のほとんどが含まれていた。このグループの反発の原因はフセイン一族、特に、当時治安、諜報を支配していた彼の兄弟の絶大な影響力に対する不満であった。

1995～6年、サッダーム・フセインの娘婿であり甥であるフセイン・カーミル・アル=マジードとその二人の兄弟であるサッダーム・カーミル・アル=マジード、ハサン・カーミル・アル=マジード、そして彼の妹(と彼女の二人の子供)と父親がフ

セインに反発して亡命し、ヨルダンに避難し、フセイン大統領から偽りの許しを受け、帰国し、そして殺害された、という有名な一連の事件は、支配部族/階級たるベジャートの歴史に新たなマクベス的時代を印した。この過程で、国家とバアス党指導部はフセイン・カーミルに恩赦声明を出したが、後に血縁集団により恩赦は取り消され、彼らは血縁集団によって殺害されたのである。言い換えれば国家と血縁集団の二元性がこれほど明確にされたことはなかった。血縁集団には既存の権利があるだけでなく、自己の名誉維持のための行動を実行する権利があることが示されたのである。主要なマジード一族メンバーが大統領に送った手紙には、次のように述べられている。「我々は高貴なる家系から裏切りの枝を切り落とした。貴殿の恩赦は、一族が刑罰を課する権利を取り消すものではない」(バグダード・テレビでの報道、1996年2月23日)。

バクル時代以後、サッダーム・フセインは三つの集団に大きく依存した。第一は異母兄弟のバルザーン、サバアーウィ、ワトバーンで、治安局、諜報局、特別組織などの治安組織において最も重要な地位にいた。彼らはマジードとは直系親族ではない。

第二のグループはマジードである。アリ・ハサン・マジードは、党北部支部、国防相、党軍事局などのポストに就いた。フセイン・カーミルは、特殊組織を担当し、これを1980年代に再編してティクリート出身の自分の親戚で固めた。さらには軍事産業相、石油相に昇進し、党軍事局長も務めた。彼の兄弟のサッダーム・カーミルは特殊組織の長であった。

第三は、日の出の勢いのフセイン大統領の実子たち、クサイとウダイである。

現在、ベジャートのこの三つの集団の間で抗争が進行している。第二、第三集団はいずれもマジード一族であるが、第一集団は違う。そもそも83年に、サッダームがフセイン・カーミルとサッダーム・カーミルを娘婿とした時、異母兄弟のバルザーンが激しく反対した。この二つの結婚はバルザーンにとって、フセイン・カーミルの家族に権力が過剰に集中し、結果として権力中枢が移動するだろうことを意味するものであった。後にフセイン・カーミルの弟が大統領の三番目の一番年下の娘に求婚した時には、フセイン・カーミルへの過度の重用を嫌ってマジードの他の家族すら反対したものである。

バルザーンと彼の二人の兄弟は、マジードの昇進により次第に排除されていった。さらに大統領の二人の息子、ウダイとクサイの台頭は、ワトバーンとサバアーウィにとり大きな打撃であった。内務大臣のワトバーンは1995年にウダイのボディーガ

ードに脚を狙撃された。クサイは、サッダーム・カーミルから特殊組織を奪った。国防相は、フセイン・カーミルから彼の父方の叔父アリ・ハサン・アル=マジードにより取り戻されたが、国軍自体は国防相に引き続きマジード一族が任命されたことに、丁重ではあるが反対の意向を示した。アリ・ハサン・アル=マジードは1995年に同職を追われたが、後任のサービト・スルターンは、湾岸戦争以来、このポストに就いた最初の職業軍人である。また彼は、最初の非マジード出身者でもある。

この権力闘争により生じた対立は決して衰えておらず、さらに将来も消えないだろう。例として、96年12月のウダイ暗殺未遂事件がある。時と場所の選び方、犯行方法、犯人が捕まっていないことなどは、内部犯行であることを強くうかがわせるものであり、最大の可能性としては、殺害されたフセイン・カーミル・アル=マジード一族による血の報復である。襲撃は軍、治安、党高官、ベジャートの実業家などが数多く住んでいる上流階級居住地のマンスール地域で起きた。ウダイの行動、予定、経路、居場所などは極度の機密事項である。さらにウダイは、ワトバーン内務相への激しい攻撃、フセイン・カーミルの排除に直接関与してだけでなく、兄弟、父親、姉、甥などとの間にいさか이가絶えたことはない。

党や国家組織に正規の地位、肩書を持たないウダイは、官僚的大衆政治を基盤にして成功した。大統領は、世代対立を利用してウダイに青年層の動員を任せた。そのため彼はオリンピック委員会、ジャーナリスト組合、作家協会（若い作家を対象にした新しい組織）、TVシャバーブ（若者向けのテレビ局）、バービル紙（日刊紙）などの長となり、周辺に巨大な支持者ネットワークを築いた。ウダイは、「冬の時代」にある青年世代を吸収するため、閣僚、治安関係局やその他の国家機関、特に内務省、財務省、外務省に対して大規模な批判キャンペーンを展開した。彼の攻撃的で無作法なスタイルは彼の支持者を驚かせ、各方面の責任者の不快を買った。国連の経済制裁を利用して彼は実業界に介入し、個人的に財を成した。彼が動員することを期待されていた青年層すら、そのむら気、感情的な愛国主義、アルコール中毒を嫌って反発している。また彼の権力基盤強化のために与えられた組織としては、準軍事的な組織であるフェデーイ・サッダーム（サッダームのために殉死する者）がある。イラク国会は1996年5月末にこれを承認したが、ウダイには外見だけで決定的な権力の本質はない。ウダイの最大の資産は父親の庇護だけである。対照的に弟のクサイは民族治安局長であり、共和国防衛隊を監督しているが、これらは真の権力基盤となろう。